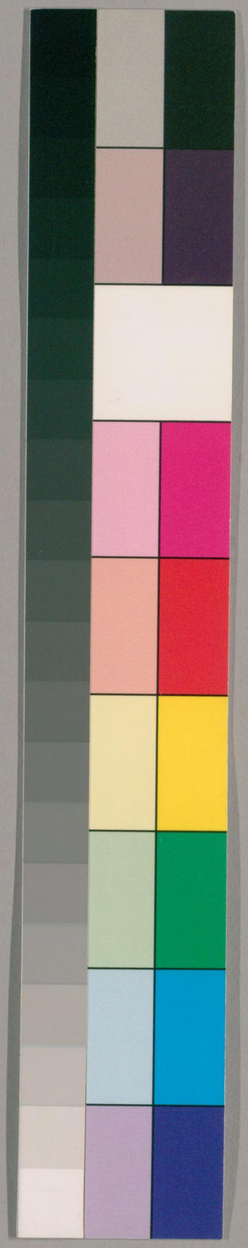
古鑑圖

明鏡誠心録 二巻

乾

859
84



国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84

ガラス使用

859-84

博古堂書畫記

鑑總說

博古圖錄

仁壽山莊

昔黃帝氏演金以作神物於是爲鑑凡十有五採陰陽之精以取乾坤五五之數故能與日月合其明與鬼神通其玄以防魑魅以整疾苦歷萬斯年而獨常存今也玄古既遠不可盡攷世有得其一者載其制度則以四靈位四方以八卦定八極十有二辰以環其外二十四氣以布其中而妙萬物運至

国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84　　ガラス使用

神者蓋託於形数之表故其為器雖囿於有
形而不随形盡雖拘於有数而不與数終且
能變化不測与造物者為友也其有周冶鑑
之数亦十有三蓋體諸同月以其十二則投
十二節其一則為鎮於中州世言其象亦云
列五嶽布七神為十五歟間十四方而方有
四篆字且不載其所以施設之方獨周官
之書以謂鑒取明水於月以其足以感格者

然也唐開元間李太者進水心鑑背負蟠龍
蜿蜒舌生太仍表其鑑曰龍護所作真龍
託於是焉久之歳大旱明皇引葉法善即鑑
祈禱而雲生鑑龍之口於是甘霈七日而足
不其神哉西漢高祖受命之初入咸陽得方
鑑洞燭腸胃此帝王之世神物護持其不誣之
典足以信後世者今所藏特漢唐之器然
其規模大抵皆法遠古是以圜者規天方

者法地六出所以象諸物八方所以定其位
左右上下則著四靈錯綜經緯則有五星
具一日之數則載之以十有二辰具一歲之數
則載之以十有二月周其天者有二十八宿拱
其位者有三神八衛或象玉女之起氣或肖
五嶽之真形九九天之上九地之下所主治者
莫不咸在則其取象未嘗不有法也是以
製作之妙或中虛而謂之夾鑑或形蛻而

名以浮水以龍蟠其上者取諸龍護之象也
以鳳飾其後者取諸舞鸞之說也以至或為
異花奇卉海獸天馬羽毛鱗甲之屬或為喜
禾合璧比同連理瑞世之珍或乳如鐘或華
如菱至於銘其背則又有作國史語而為
四字有效栢梁體而為七言或單言之不足
或長言之有餘或以紀其姓名或以識其歲
月如言尚方玉堂者用於奉御也如言宜官

宜侯王者用之百執也如言宜子孫者用以
藏家也若千秋萬歳之語則所以美頌者
如此作十六符篆則所以辟邪者如此然則
雖曰漢唐之物其稽古必自此始耳於是列
序其次而録之於後焉凡五金之序黄金為
上白金次之銅又次之而鐵錫為下故斯鑑以
銅先焉鐵次之若史造化之本莫先於天地
故首之以乾象乾象者百神之主故以百神

附之史參造化主百神則可以造形器故次之
以異質之物如蛻形浮水者是也為器如是史
然後可以歌頌其義故次之以詩辞可以被聲
詩則必享多宜故次之以善頌頌必有致艱
之道故次之以枚乳而乳者養人之道也有所
養則鳥獸草木莫不咸若而來儀為瑞者
有之故又次之以龍鳳花鳥梅獸也然而大功
者若拙繪事者後素則純素者其本也於

誠心録巻下

是又以純素終焉此其序也

国立国会図書館

一海馬狻猊鑑

誠心録巻下

国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84
ガラス使用

海馬猴猊鑑　依元様制表

徑七寸三分重二斤五兩無銘

婦人隙産之砌其産屋乃桓などにかけて用給ひて平産なるしめ母子ともにあらず面をうるり海馬の説ハ本草綱目ゆゑ其しかしきなり

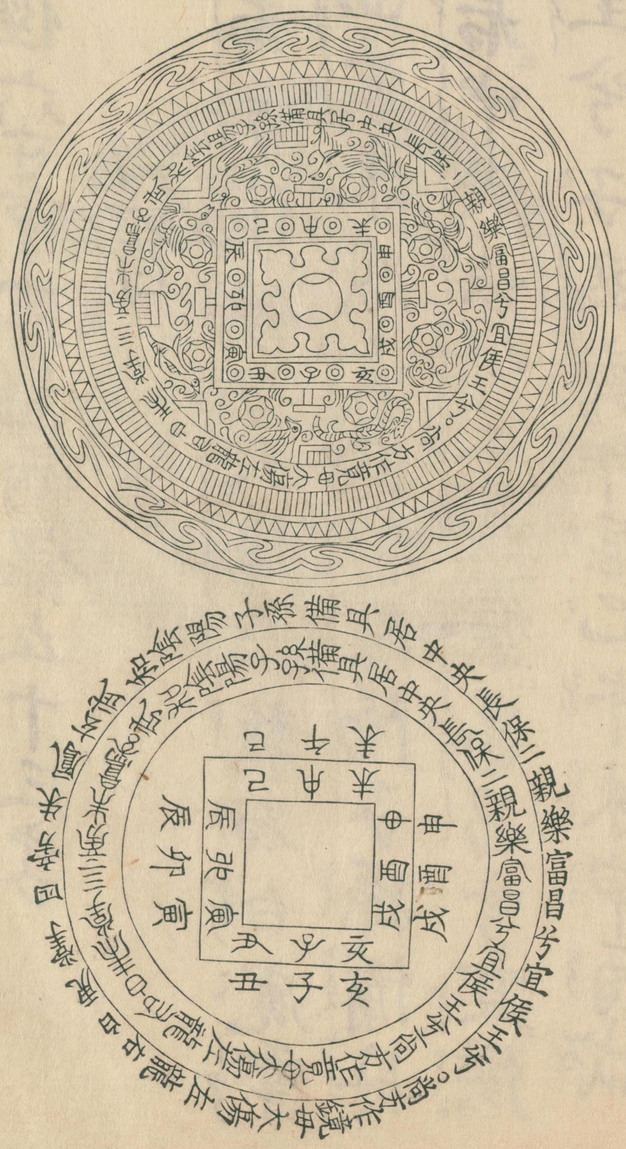
一舞鏡

誠心録巻下

舞鏡　李氏録云漢武帝時舞人所執鏡也

六

一尚方鑑　一



誠心録巻下

一

尚方鑑　依元様製

徑六寸重一斤四兩銘五十三字

銘曰

尚方作鏡母大傷左龍右白虎掌

四旁朱鳳玄武和陰陽子孫備具

居中央長保二親樂富昌兮宜侯

王兮子丑寅卯辰巳午未申酉戌

亥

一玉堂鑑

玉堂鑑　依元様製

徑一尺一寸六分重九斤半銘十六字

銘曰

玉堂偏親　長宜子孫

神冶有因　志煉成真

右ハ鐵ゆゑ造るゆゑ以方言之則銅

南方之金而鉄之位少也於是凡銅鑑者先

冒鉄ハ置其後ゆゑなり

一萬春鑑　二

萬壽鑑　依元様製

便八寸八分重七斤四兩銘四十字

銘曰

有玉辭夏惟金去秦俱隨草故

共集鼎新儀天写質象日開輪

率舞鸞鳳奔走鬼神長懸仁壽

天子萬春

一千秋萬歳鑑

国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84　ガラス使用

千秋萬歳鑑　依元様製

但七寸六分重三行十五兩銀八字

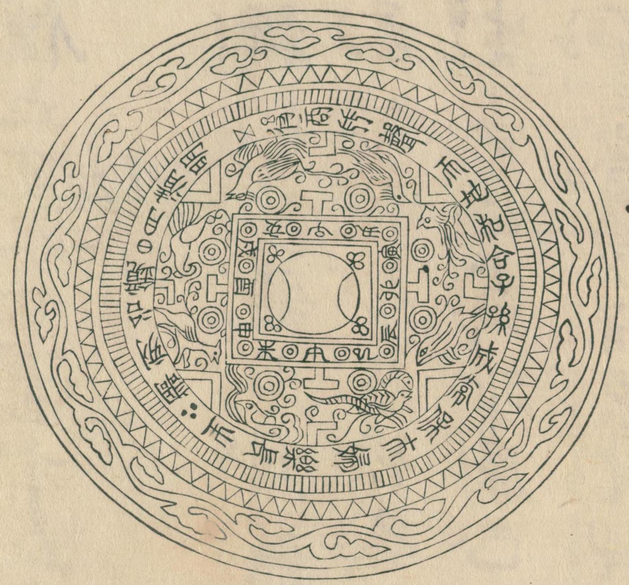
銘曰

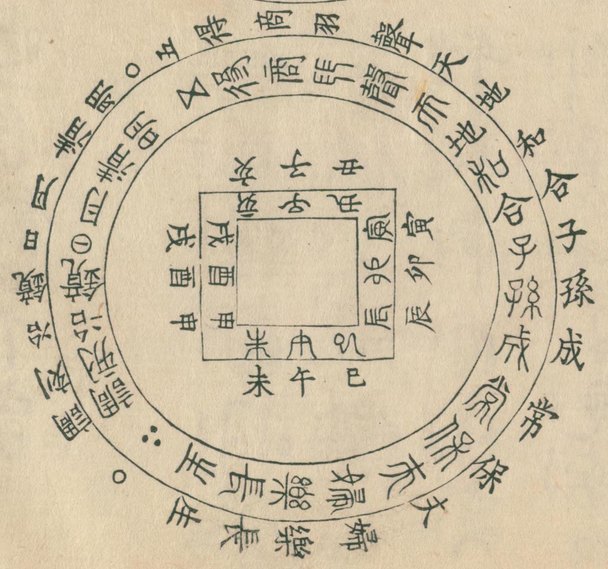
千秋万歳冨貴不断

右は長者之十徳之そなるゆゑ寶鏡

ゆゑ于ゆゑ

一長生鑑





国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84　ガラス使用

長生鑑　　依元様製

徑五寸三分重十五兩一分銘四十字

銘曰

調剖冶鏡日月清明五得高羽聲
天地和合子孫成常保夫婦樂長
生子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥
右之宝鏡保長生理劉招が傳ゝ見渉爲

一不老鑑

不老鑑

依元様製

徑五寸八分重十兩三分銘三十七字

銘曰

壽如金石尚方作鏡真大好上有仙人不知老渇飲玉泉飢食棗子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥

右之宝鏡ハ養老乃こゝろり素乳鑑の奥書ニ見ヘル

一五嶽真形鑑

五嶽真形鑑　依元様製

便八寸重三斤無銘

右五嶽真形之美妙をあらわす　見遵生八牋

藏經曰五嶽之神分掌世間人物各有

攸屬如太山乃天帝之孫群靈之府

為五嶽之祖主掌人間生死貴賤脩

短衡嶽主掌星象分棲水族真龍

嵩嶽主掌古地山川牛羊食啗華

嶽主掌金銀銅鐵飛走蠢動恒嶽

主掌江河淮濟四足負荷等事

抱朴子曰脩道之士栖隱山谷須得五

嶽真形圖以佩之則山中魑魅虎虫一

切妖毒皆莫能近

漢武帝元封三年七月七日受之西王母流布

人間後太初年中李充自稱馮翊人三百

歳荷草罌負圖邀遊武帝見之封負

圖先生故世人能佩此圖渡江海入山谷
夜行郊埜偶宿凶房一切邪魔魑魅魍
魎水怪山精悉皆隱遁不敢加害家居
供奉横悪不起禎祥求正与云々

[illegible]

一長宜子孫鑑

長宜子孫鑑　依元様制表
徑五寸九分重十五兩銘四字

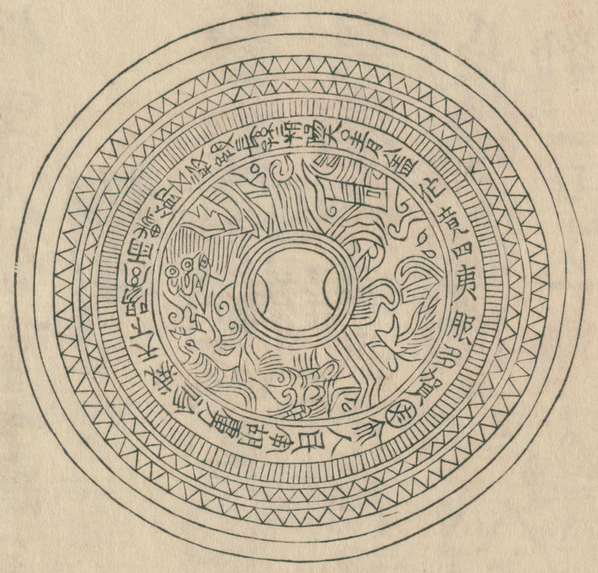
銘曰
長宜子孫
或人問云此巻にしるかせ給唐の鏡ハいづれを
則ち給ひし其秘流を以て作り給ふ乎但
我物の流我を以て作りたる事乎　答云あの
号繪に載るかぎれかしのかぐみハ何をも

ろあしの秘流を傳ひ交しく其秘流に符
合し作る事也唐のかぐみを吾朝八咫の
鏡其法流を以て作り傳らざ唐流ならば
いつぞからざ則漢黄石公より張良へ傳
らまし麾目鏡作り様其旧規予家に受
持せりかなが持へ母をろあしの知ぐるなれ
かぐこ小書の中より其規模制度選びもし
給ひ一二名別其妙を備具中也

此長宜子孫鑑ハ則銘のごとくなぐ子孫
よろしく家累代世嗣繁栄乃寶鏡
ゆゑなるべし

唐長宜子孫鑑　一面
漢長宜子孫鑑　四面　大小
已上又亀あり於博古圖録はさびら也

一青蓋鑑



青蓋鑑　依元様制衣
便四寸八分重十兩三分銘三十四字

銘曰

青蓋作鏡四夷服多賀國家人民安
胡虜殄滅天下陽風雨時節五穀熟
長孫々朔陽天　人をなしなふ乃ゑなりしからば
則一ひとつ一郷に潤色して青蓋鑑一めんをうやまひ
用ひ給らん田畠五穀如飛し十こくも不化ある
なりしばれさうらかゞみるべし口傳

一瑞圖鑑

瑞畫鑑　依元拓製

徑六寸五分重二斤三兩銘四十三字

銘曰

連理樹　合壁　鳳凰　嘉禾　合歡蓮

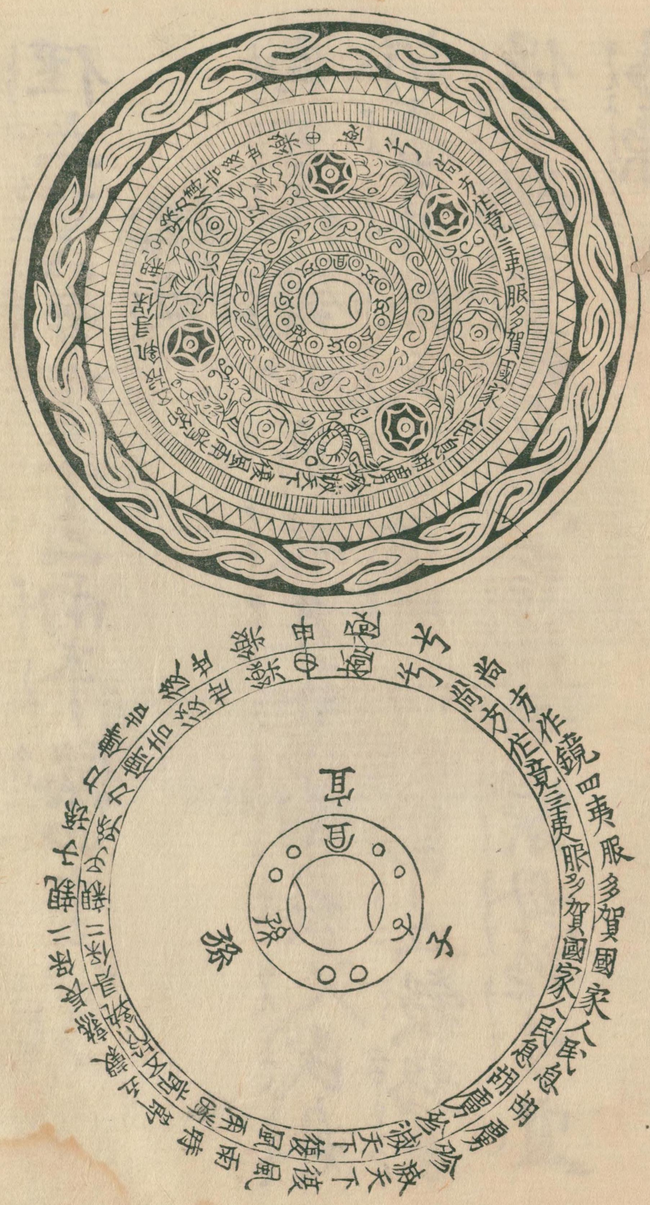
比翼　連理竹　金勝　同心鳥　嘉麦

嘉瓜　比目奠　禽獸　奠竹　草樹　合

璧　金勝　並　出瑞　焉　右婚姻に可用比

翼連理偕老同穴のあらんに合ふ同方宜遠

一　尚方宜子孫鑑



国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84　ガラス使用

尚方宜子孫鑑　依元様制衣
徑五寸八分重十三兩半　銘四十六字

銘曰

尚方作鏡四夷服多賀國家人民息
胡虜殄滅天下復風雨時節五穀熟長
保二親子孫力傳吉後世樂毋格兮宜
子孫

右ハ國守城主之良將用ひ[illegible]

一十六符鑑

国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84　ガラス使用

十六符鑑

徑七寸九分重一斤十一兩銘三十四字

右隋の鏡まぐ一面也神符文字博古圖に詳也

又時珍曰鏡乃金水之精内明外暗古鏡如

古劍若有神明故能避邪魅忤惡凡人家

宜懸大鏡可避邪魅　此言に付せ家くまち軒や

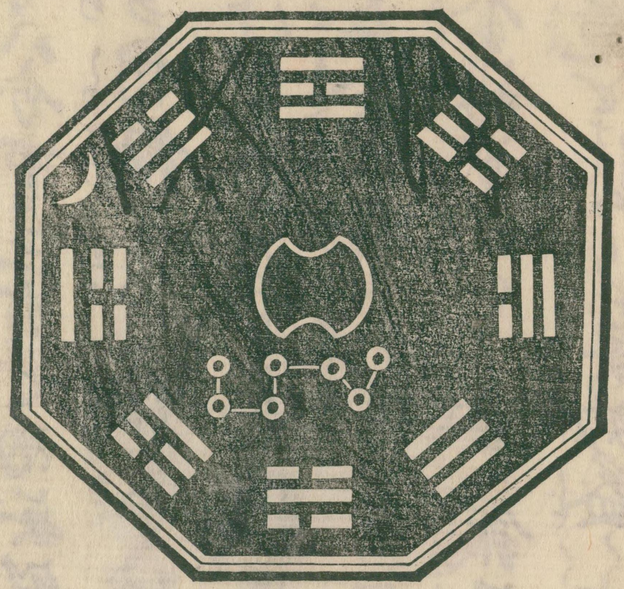
宏園の内ゆゑ丹懸十六符鑑一面貯ゆゑで避百邪

室也故野狐託ちゐ人不可能入其園子鬼病ホ可治乎

一二十八宿鑑

二十八宿鑑　天之二十八宿地之廿六舎と
俚七寸二分圍二行五兩銘六十一字
銘曰
室壁奎婁胃昴畢觜參井鬼柳星張
翼軫角亢氐房心尾箕斗牛女虚危
亖月三月四月五月六月七月八月九月
十月十一月十二月　木火土金水

一八角八卦鑑



国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84
ガラス使用

八角八卦鏡　八面之流と一面之流あり
便七寸八分重三斤七兩無銘
惣鏡之内鐵を以て作るもあり此鏡も鉄
ゆゑにはらかねかへとも博古圖之惣鏡なも
鉄とは五金之内に為下ゆゑにはまとは五種
内或は金銀とこれらし或は銅錫次之此四種
を以て鏡をはらうは灵妙益く可勝鉄をのう

一龍鑑

国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84
ガラス使用

龍鑑

依元様制衣

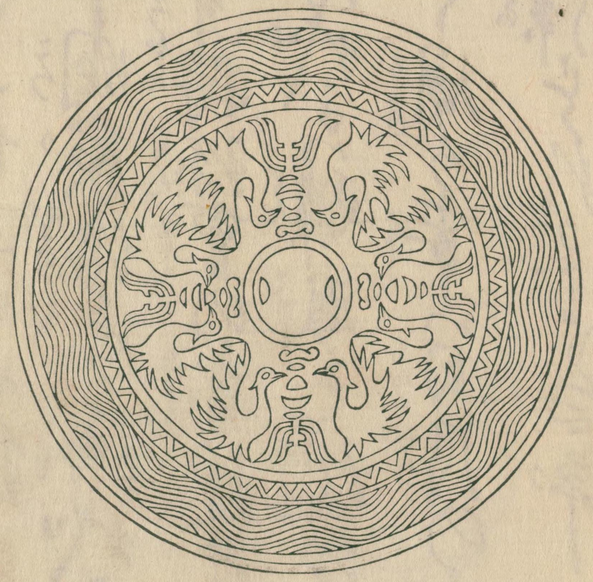
徑八寸八分重三斤十五両無銘

右ハ致養之道なれバ至万物之生

各得其宜ゆゑにかたりあり又位階より

いたらん時用ゐれ像なり

一雙凰鑑



国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84
ガラス使用

雙鳳鑑　依え様製

便五寸重一斤三兩無銘

右ハ天下國家治まろ御代と中下り
るべく可持珍重の室境なるべし聖
賢之御代ハ驊鳳も現るゝのもらう
又るべく用ひ事ハ日月の高下なるの
御親ハ御とおもひがごとき乎

一海獸蒲萄鑑

国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84　ガラス使用

海獸蒲萄鑑　依元様制衣

徑八寸三分重四斤五兩無銘

右ハ治世所用ことゝりありまゝ病患

を海ぬるゝ事し唐乃陳叔遠母に蒲萄

をもてめて渇の事をいを治せしを実と

なりとぞ

一武徳鑑

上元啓祚靈鑑飛天一發仁壽千萬斯年○武德五年發於十八月十五日甲子揚州總管府造事鑑一面充癸未年元正朝賀其銘曰

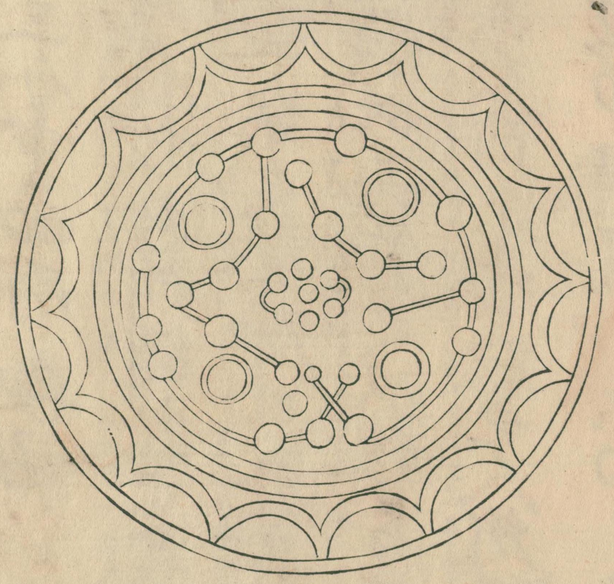
武德鑑　依元相製

徑九寸五分重五斤五兩銘五十三字

銘曰

武德五年歲壬午八月十五日甲子揚州
揔管府造青銅鏡一面充癸未年元正朝
貢其銘曰上元啓祚靈鑑飛天一登仁
壽千万斯年

一素乳鑑



素乳鑑　依元様制表

徑三寸三分重四兩　無銘

右鑑鐘有枚枚所謂乳也彝有乳乳所以養也蓋樂之聲所以養其耳酒之味所以養其體此其飾之以枚焉鑑亦有枚者所以燭其形而主養故也人所祝頌以養之至也ゆゑなり　博古圖録ゆゑなくはなしびらゆゑなり

一宜君公鑑

宣君公鑑　依元相製

径三寸九分重七兩三分銘八字

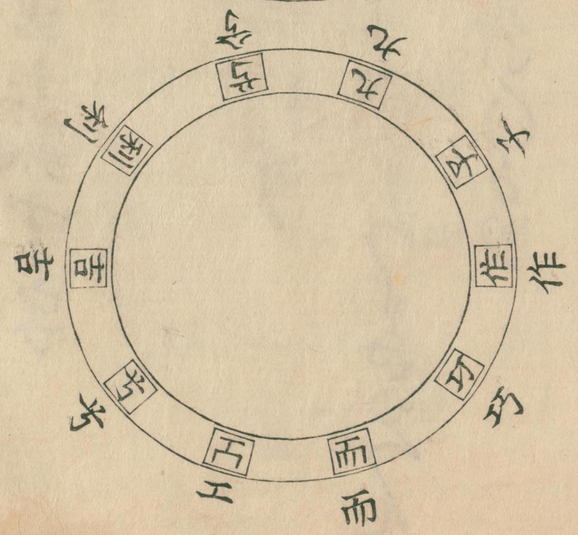
銘曰

君公官三長至宜士

右八鑑之為用世所不有故其言有所謂

宣君公信之宜君ゆうんなり

一九子鑑



国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84　ガラス使用

九子鑑　依元格製

徑四寸三分重十兩半銘十字

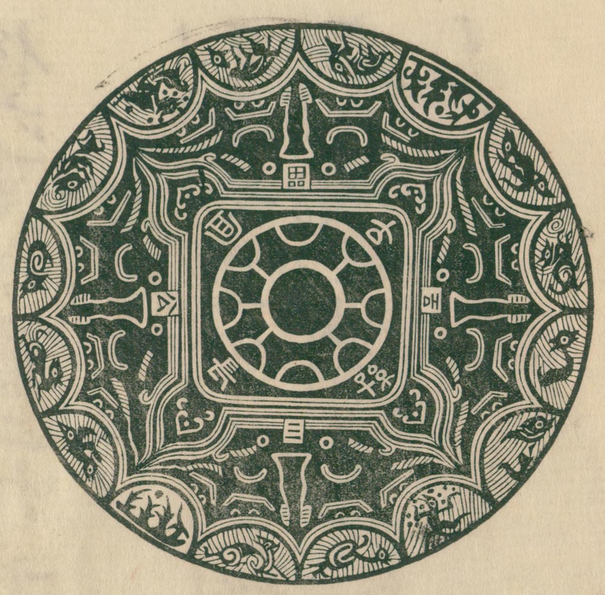
銘曰

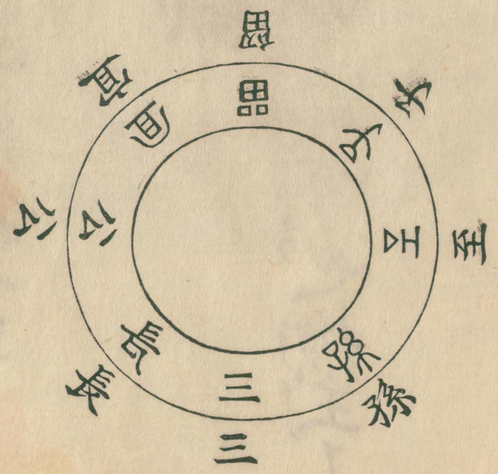
九子作巧而工兮吉利兮

右ハ宜民宜王よそ下によろしきゆへん

宝家之道よろしきのみなり

一十六花鑑





十六花鑑　依元様製

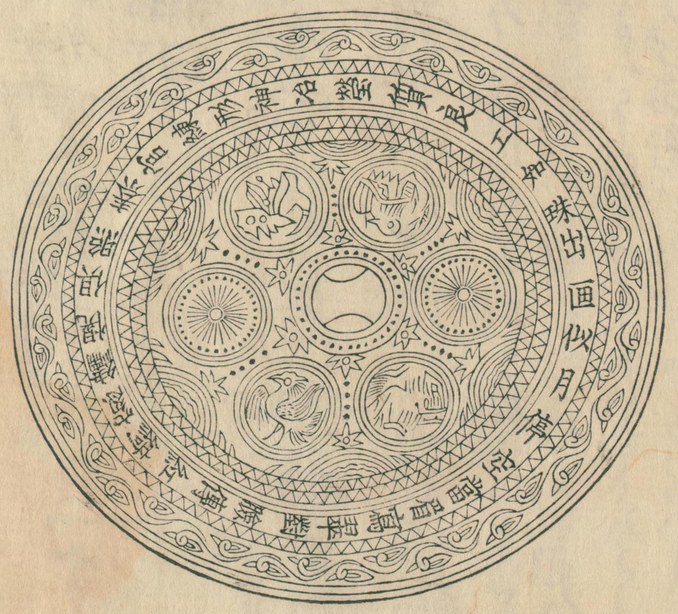
但六寸八分重二斤十五兩銘八字

銘曰

三長公宜留子至孫

右凡頌之兆所宜雖可頌可也候王より

一瑩質鑑



国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』 請求記号 859-84　ガラス使用

堂質鑑

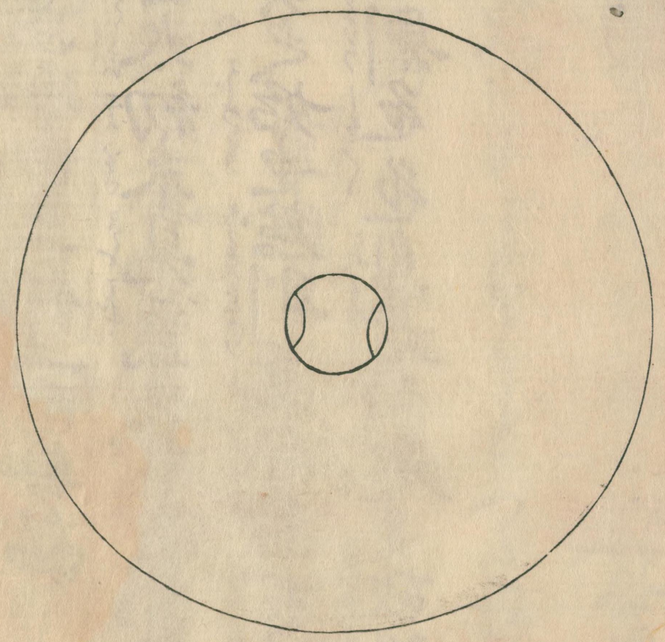
徑四寸五分重一斤半銘三十二字

銘曰

練形神冶堂質良工如珠出匣似月停空
當眉寫翠對臉傳紅綺窓繡幌俱照秦
宮

右のみき鏡の名なり何も男女のまだこれとおがしき鏡を
堂質鑑号させ付くおしかしを用ひのみ[illegible]
[illegible]の鏡一くるまわらるあく其規模當録いか
[illegible]鏡を人の敬し[illegible]
[illegible]世よすくなからんとくるまよりおのづから鏡をおろそかに用ひ
[illegible]凡神[illegible]佛[illegible]人にも名れわれよまそへて知るべし

一純素鑑



純素鑑　依元様制表

俓五寸四分重一斤一兩無銘

列子曰太初未見氣也太易氣之始也太素質之始也然則氣變而有形形具而有質則色色自是而起矣故以純質者終之

右漢唐隋之鏡二十五面之圖也俓重銘

本内廿三面之圖詳於博古圖録内二面之圖詳於三才圖會其餘百八面之都合博古圖にあり

[illegible]

一長生鏡　本草綱目に劉根傳

俓九寸面新像有秘習裏紋口傳

人思形状可以長生用九寸明鏡照面熟視令自識己身形久則身神不散疾患不入

一無疾鏡

徑口傳裏紋有習法式各別欲挙家無疾可遁歳疫鏡之灵妙乎

△樵牧閑談云孟相時張敵得一古鏡僅尺餘光照寝室如燭擧家無疾號無疾鏡

△異聞記云隋時王度有一鏡歳疫令持鏡諸里中疾者照之即愈云云

右安説之霊妙豈疑あらんや然則りつこしの

其似をして今吾物まぬかれ灵妙の境つきりとげ

しかるかつて或里中小歳疫を疾者を愈し

或ハ挙家云疾ハ愚暗ながら雖足以信後世其

境之光照寝室如燭制衣之事未勘

一八陳鏡

八面一面ハ河圖鏡

徑裏形秘中之秘なる故不記圖

城中藏鏡者自古有此法以八卦鏡藏東

西南北四隅之樽甍周此法而近世於中守

臺俗曰天守藏於一鏡名曰大極鏡又說
曰以八陳鏡藏于東西南北四隅之櫓臺以河
圖鏡藏于中守臺

兵具に用ふ鏡魂なり

一六鼻鏡

俚裏形容山傳

說曰

京師王氏有鏡六鼻有雲烟照之則
左右前三方事皆見黃巢將至照之

兵甲如在同前ゆゑ

今之世兵甲韻上安鏡者益出于此歟

鏡中一切妖魅可怖畏事

○抱朴子曰萬物之老者其精悉能託人形惑人
唯不能易鏡中真形故道士入山以明鏡俚九
寸以上者背之則邪魅不敢近自見其形必反却
走轉鏡對之視有踵者山神無踵老魅なり

[illegible]

大峯をかけさせのふ時鏡にてづからほくり
給ひ箱に入りさせ給ふと申伝ひそのうち醍醐
乃開山聖宝為師も大峯へ分入給御發足之
時鏡もさせのふかるん則其鏡大峯山上行者
堂に納置ひたまふこれわりかのくり給ひ猿人とのふ
猿人鏡を懐中とべき義なり猿鏡之法わら
まし載之一ふハ道祖神の災難わるなるらば一ふ
は山狗神祟をなすとべからず尤狐狸犬麻鳥

獣草木等努くたらりをなすとべからず

△遵生八牋曰有道士持魘魅鏡狐狸草木
為祟照之即見本形

△白孔六帖曰抱朴子曰昔張蓋二人並精思於蜀
雲臺石室中忽有一人黄練衣葛巾到其
前曰労乎道士辛苦幽隠於是一人顧視鏡
中則廓也

△搜神記林廬山下有三亭人毎過此宿或

病死昵有到伯夷者於明燭而坐中夜忽
有十餘人来自共蒲博伯夷密以鏡照之
乃是群犬也

△開元天寶遺事長安城中毎月蝕時即古
女取鑑向月撃之滿郭如是蓋云救月蝕也
凡鏡ハ与日月合其明之節也ちろいはぶらも我約ゆくいま
ざるし後の世乃古女ろうわやしきまやわらん乎

△宋史曰秦寧懸新支得鏡厚三寸徑尺二照
見水底与月争輝病熱者照之心骨生寒
此灵妙ハ得不更後世の流匠可得造焉乎厚三寸之
めぼらしきゆへまこれ我のを

△拾遺記曰周穆王之時渠と云国よりあく海
ゆ大齊鏡其廣さ三尺六寸暗中に照之如晝
人此鏡ゆ向ひ語ハ鏡中に郷音應と云く　是一へ奇
怪のかゞみなりもの灵妙得ふ更得る後世の流匠はらる
海ゆとともあるべけもどもあまこれ我を

若君御誕生之祝言御祝物に可献鏡
使例之事

玄宗紀曰以降誕日宴与僚於華萼樓下以

八月音為千秋節三公以下献鏡及菓露
嚢云々准之若君御誕生之打節或長生
鑑又或長宜子孫鑑千秋萬歳鑑其疾鏡
不老鑑等のめぐるくわてなる成者刀すどよ
とりせん人少綱拘に可奉持鏡法例年益萬
寶全書に得他人鏡生貴子云々
史明鏡誠心録二巻ハ我竹馬にしらをわげしあら
よりまいらせ又がきたへのこゝろはぐ身なるもし

よりまいらせ理のわれかなれかなとし月とおもり
侍り事かけいかゝしなきまぎ也とはせんぞけく
なれん君乃相のうこ所ふるら孫だ何計
乃事かはまれいでん拘ハ縦を結してこそ長れ
ゆしを至るなかぶ能なるめとせひそめしよ
そこゝろなるれおとくさをけぐり侍りきよの巻
ハ和歌の明これをしへ乃結りしをしろひ集て
志すし下の者よハ唐の古流の筆乃蹟をとぐ

5644

ひろるもしら若元(れ)ゑんそなりしむろ人おやまちぬ
けづり宜(よろしき)をたまけ給(ゑ)ぐ末(すゑ)れ世(よ)かけくらぬ文(ふみ)と
をるりなんかし

洛陽二条室町住

寛文七丁未年正月吉日

鏡匠人見佐渡大椽

藤原政親謹而書之

二条通松屋町

唐本屋田中長左衛門開板

859
84

一終

国立国会図書館　タイトル『明鏡誠心録 2巻』　請求記号 859-84
ガラス使用